

令和元年度「全国家庭教育支援研究協議会」パネルディスカッション議事概要

本資料は、令和2年2月18日に開催した令和元年度「全国家庭教育支援研究協議会」におけるパネルディスカッション（※）で出された意見を文部科学省において議事概要としてまとめたものです。

※パネルディスカッション

それぞれの地域の実情に応じた“アウトリーチ型支援”の普及・定着に向けて、「なぜ今アウトリーチ？」「何をどうやるの？」「どんなことに気をつけるの？」の視点から、関係自治体からの事例報告の内容を踏まえ、協議を行いました。

1. なぜ今アウトリーチ？

（コーディネーター）

なぜ今アウトリーチが必要なのか、アウトリーチ型支援が有効な家庭教育上の課題であるとか、アウトリーチ支援の意義についてどのように考えているか。

（茨城県）

茨城県では子供の発達段階に応じた家庭教育支援資料を作成、全保護者に配布し、それをもとに講座等をしてきたが、来てほしい保護者が来てくれないので届ける支援を検討した。県では訪問型支援や企業における講座、乳幼児健診等を活用した教育と福祉の連携を進めている。

アウトリーチ型支援は忙しい保護者や仲間のいない保護者には有効であると考えます。

（山口県）

アウトリーチ型支援の意義は“つながり作り”。昔と比べ、就学時健診の待合場所での雑談が少なくなっており、保護者のコミュニケーション能力が低くなっているのでは、と感じている。

（岩国市）

支援活動をしている中で、「話せる人がいないんです」という保護者がいた。下手に話してしまうと話に尾ひれがついたり、むやみに拡散したりしてしまうかもしれないので、本当に信頼して相談できる人がいない。スマホ等で繋がっているように見えても、案外、保護者は孤立している。そういう保護者を見て、アウトリーチ型支援が必要なのでは、と考えている。

（釧路市）

ひとり親世帯や生活保護受給世帯が多く、経済的な問題から生活に余裕のない家庭が多い。そのような家庭は課題も複雑で、それらに対応するためには、アウトリーチ型支援が必要だと考えている。

（泉大津市）

学校現場では、つつい、不登校や乱暴な行動、忘れ物が多い、落ち着きがないなどの目に見える子どもの問題行動を何とか解決したい、そのためにサポーターに動いてほしいと要求しがちである。しかし、サポーターの役目はその行動を止めに行くことではなく、保護者に関わって支援を行うことであり、

支援の結果、子どもに現れている問題も間接的に解決していくものと考えている。そのため、子どもへの対応・支援は学校が、保護者のエンパワメントに向けた対応・支援はサポーターがアウトリーチ型で行うといった役割分担をしている。

(湯浅町)

訪問して分かったことだが、あるマンションでは一棟ごと自治会に入らず、行政の広報等が届かなくなっていた。そうすると、子育てが地域から抜け落ちてしまう。アウトリーチ型で家庭を訪問することで、抜け落ちることなく支援ができる。

(コーディネーター)

背景としては、スマホ等々のつながりは増えているが、直接的な地域のつながりが希薄化している。直接的な寄り添いができるのがアウトリーチ。

2. 何をどうやるの？

(コーディネーター)

アウトリーチ型支援の具体的な手順や支援手法、支援内容、実施体制等、それぞれの自治体の特色や苦労した点などはあるか。

(茨城県)

市町村における課題はまちまち。県がモデル的に行ったのは、不登校を対象とした支援や早期発見・未然防止の全戸訪問などがある。市町村においては社会教育主事や担当者が中心となっているが、書類の作り方や協議会の進め方などを県がバックアップし、県としてもそれらの情報を他の市町村と共有できる形にして、広がるように取り組んでいる。

また、企業における講座では、プレゼン資料をWebサイト（市町村担当者限定）で共有するなど、取り組んでいけるようなシステムづくりに心がけている。

(コーディネーター)

アウトリーチ＝家庭訪問と捉えられることがあるが、企業における家庭教育講座もアウトリーチ？

(茨城県)

そのとおり。深刻な悩みのある家庭には家庭訪問、そこまでではないが困っている家庭には、企業にお邪魔して講座を行って、相談を受けたりしている。

(山口県)

山口県ではコミュニティ・スクールと連携した家庭教育支援を行っており、地域はもちろん学校や様々な人とのつながり作りを重視している。今年度からはPTAが関わる所もあり、より多くの人とつながるような支援を進めている。

(コーディネーター)

県内のコミュニティ・スクールは何%くらいあるのか？

(山口県)

公立小中学校では 100%。また、公立高校も次の 4 月で 100%になるので、もうまもなく県内の公立学校は 100%となる。

(コーディネーター)

家庭教育支援事業とコミュニティ・スクールの親和性は？

(山口県)

保護者の困り感＝子供の困り感＝学校の困り感なので、家庭教育支援で保護者や子供の困り感が解消されれば、学校の困り感も解消されるのではないか。学校長としては、学校経営の柱の一つとして考える必要もあり、相性は抜群だと思われる。

(岩国市)

不登校、登校渋りで保護者は困っているが、毎週家に来られることは抵抗を感じている様子。そのため、“できるところから、できる人に届けよう”をモットーに活動。週 1 で子供の登校支援をしつつも、年間数回しかお話をしなかった保護者から、「上の子の支援も…」と言ってもらい、家庭訪問ができるようになったケースがある。

また、訪問もできず話もほとんどできない保護者でも、“シュークリームを食べる会”だけは来てくれて、支援につなげられたケースもある。届けるというのは家に届けるだけではないと感じた。

(釧路市)

直接的な支援が必要な家庭は、福祉的な支援が必要。教育委員会としては不登校などの教育課題への支援を行うが、背景には保護者の養育能力や経済的な問題など、福祉的要素が強い。そのため、福祉の専門家でもあるスクールソーシャルワーカーがいてくれるのは大きい。

実際の要請は学校現場からが多く、学校としても教育委員会に S S W がいるのは安心してもらえる。

関係機関との連携も重視しており、生活保護の担当職員が訪問した際に、子供に何かあれば教育委員会に連絡をもらえるようにしているなど、さまざまな方向から支援に繋がるようにしている。

(コーディネーター)

釧路市ではユニバーサルとターゲットの 2 方向から支援をしているが、特にターゲット型のファースト・ステップ・プログラムについて詳しく教えてほしい。

(釧路市)

不登校の中でも家から出ることができない、コミュニケーションが苦手な子供に対して、居場所づくりを通して、まさに“最初の一歩”を踏み出してもらおう為のプログラム。S S W やチーム員が支援の必要な子を見つけ、子供にはモノづくりや体験を通して、コミュニケーション能力、自己肯定感を高めてもらい、教育委員会的には学校復帰を目指す。そうはならなくとも、卒業後、社会的で自立できるように、という気持ちで取り組んでいる。

(泉大津市)

保護者の掘りおこしを大切にしている。小学校配置型にしても福祉部局との連携にしても全戸訪問にしても、支援が必要だろうと思われる保護者を見つけることに全力を注いでいる。

また、エンパワメントも重要と考えている。じっくりと傾聴することで、自然と保護者の子育てに対するやる気が出ると考え、そのあたりを今後も進めていきたい。

(コーディネーター)

傾聴の研修はやっているか？

(泉大津市)

市としては研修を行っていないが、サポーター会議を毎月行っており、そこで具体的な事例を出しながら、アプローチの方法を模索している。

(湯浅町)

講演に来てくれない保護者を何とかしようと考えていた時に、文部科学省の訪問型支援事業を知った。訪問の際、町の規模を考えたときにターゲット型にしてしまうと、「なぜうちに来たのか」「うちには来てくれなかった」と噂になるので、全家庭を回るようになった。

単に訪問するだけでは話も続かないので、お土産として情報誌を作成することになった。保護者と話すためのツールとして使っている。

(コーディネーター)

お土産を作るとなった時の湯浅町での議論を教えてほしい。

(湯浅町)

はじめは訪問するときの話のネタとしか考えていなかった。今では情報誌の写真を学校にお願いしたりして、学校とのつながりも強くなってきた。

始めるときは、あまり深く考えず、とりあえずやってみよう！ダメならやり方変えようという気持ちでスタートしている。

(アドバイザー)

直接的なつながりの意義、大切さを感じる。アウトリーチだけが家庭教育支援ではないが、届かない人へ届ける、すべての子供・家庭に支援を届けるんだ、という熱い思いを皆さんから感じる。

また、皆さんからは“まずやってみる”、という気持ちを感じた。

(コーディネーター)

“走りながら武器を拾って戦え”と私もよく言う。しっかりと制度を定めて実施しても、うまくいかないのが支援の世界。まずやってみることが大事だと感じる。

3. どんなことに気をつけるの？

(コーディネーター)

アウトリーチ型支援を効果的にする工夫や足りないヒト・モノ・コトを補うための工夫はあるか。

(茨城県)

市町村からは財政的な課題をよく言われる。その時はエリアやターゲットをしぼるなど小さく始め、徐々に予算的にも人的にも広げていくように指導している。長期的な視点でやることが大切。

また、学校現場と福祉部局の連携も大変だと感じている。こちらも年数を重ねていくことで壁がなくなり、両者との関係は改善しているように感じている。

支援員の力は大きいので、支援員のやる気が出るように勇気づけていくことも必要。

(コーディネーター)

市町村のモチベーションを上げる工夫は？

(茨城県)

やりたいと思っている市町村はやってくれている。今後はそれ以外の市町村に対しても、家庭教育支援の良さや有用さを伝え、やってもらえるよう情報発信をしていきたい。

(山口県)

家庭訪問にハードルの高さを感じている自治体も多いため、県では“アウトリーチとは訪問型だけではない”と伝え、訪問型チームの普及ではなく、支援方法の一つとして、訪問型の手法の普及を進めている。

取組を通じた実感として、悩みや不安よりも、「学校に聞くほどじゃないけど、子育ての先輩に聞いてみたい」程度のちょっとした疑問を持つ保護者の方が多い。そのため、支援員には高い専門性を求めるのではなく、話を聞ける地域の人で大丈夫、誰でもできるんだ、ということを伝えている。みんなで取り組む、みんなの範囲を広げるよう取り組んでいる。

(岩国市)

長期間個別支援をするケースもあれば、短期間で学校に橋渡しするだけで解決するケースもある。支援を受けるということは、保護者にとってもつらいので、できるだけ短期間で解決するようにしている。

保護者からしたら、チームは学校にかなり寄った存在に見えている。学校に不信感を持つ保護者もおられるので、できる限り保護者に寄り添い、学校とつなぐことを第一に支援を行っている。立ち位置にはかなり気をつけている。

岩国市のチームには、SSWや専門家はいないので、自分たちがつぶれないためにも、どこまでやるかは気をつけている。

(コーディネーター)

立ち位置で気をつけていることがあれば、補足してほしい。

(岩国市)

先生が言う言葉に、支援員が絶対言ってはいけない言葉がある。不登校児童に対し、先生は「学校に

来なさい」というが、支援員としては「家にいる時間も大切」と寄り添ってあげることも大切。先生と同じことは言わない方がよいこともある。

(釧路市)

子供、保護者に寄り添った支援が必要。家庭訪問にしても、自宅が嫌だという保護者もいるので、その場合は学校や教育委員会、子育て支援センターなど、相手が楽にできる場所で支援を行う。

関係機関との連携も大切。どのような事例でもスクールソーシャルワーカー（SSW）がすべて解決するのではなく、虐待案件なら児童相談所など、それぞれの役割を明確にすることで、しかるべき機関とつなぐことができ、問題解決につながる。

(泉大津市)

カネについては、予算編成の際は財政課に家庭教育支援の重要性を説き、予算を用意してもらっている。また、家庭教育支援で使える補助金等を見つけるよう常にアンテナを張っている。

ヒトは、サポーターが重要なのはもちろんのこと、家庭教育支援の目的を理解してくれる人も重要。学校現場や福祉部局にそういった人を増やし、それらの人が課題を抱える家庭を見つけられれば、より大きなアンテナになる。

サポーターには課題を解決するのは専門の職員が行うので、傾聴を重視し、保護者のエンパワメントにつなげるよう活動してもらっている。

(コーディネーター)

実際にこの事業を通して、教育委員会の職員と福祉部局の職員との間で、仲良くなったか？

(泉大津市)

相手の顔と名前が一致するようになったし、こちらの名前を伝えると理解してくれるようになった。最後は人のつながりだと実感している。

(湯浅町)

よく教育委員会と福祉部局のそれぞれが、相手が情報をくれない、と言うケースを聞く。また、個人情報取り扱いも、それぞれに提供しあうのが難しい状態にある。それを解決するために、湯浅町では事業の主催を湯浅町・湯浅町教育委員会の共催にした。そうすると情報共有や個人情報についてクリアできた。

支援員は保護者と顔が見える関係づくりが大切、話を聞くことを大切にしている。当初、支援員を依頼した時は、なかなか受けてもらえなかった。理由は「専門的な知識がないため、対応ができない」等だったが、「話を聞くだけでいい、答えるのは学校やSSWなどが対応する」とお願いし、支援員になってもらった。

(コーディネーター)

支援員がつぶれないために、メンタル面のケアなどは行っているか。

(湯浅町)

支援員同士のおしゃべりや食事などで和気あいあいと楽しんでいるので、ストレスはないのではと思

っている。

(アドバイザー)

小さくてもスタートさせることが大事と感じた。規模が大きすぎると、すくんでできなくなってしまふ。できることから始めていくことの大切さを感じた。

チームとグループの違い。チームは一人一人に主体性があり、共通の目標をもって力を発揮する。一見バラバラだが掛け算されてより強くなっていく。

信頼は大切。信頼させるのではなく、こちらが信頼することで向こうも心を開いてくれる。

子供や保護者がいるんな人と出会って、変わっていくことが、ある種の“学び”といえる。そのような“学び”が中心となって、家庭教育支援が進んでいると感じた。

【参 考】

(コーディネーター)

水野 達朗氏 ((一社) 家庭教育支援センターペアレンツキャンプ 代表理事)

(アドバイザー)

松田 恵示氏 (国立大学法人東京学芸大学 副学長)

(パネリスト)

松代 由美氏 (茨城県教育庁 総務企画部 生涯学習課 就学前教育・家庭教育推進室 社会教育主事)

児玉 勉氏 (山口県教育庁 社会教育・文化財課 主査)

川本 美由紀氏 (岩国市家庭教育支援チーム「平田の子どもたち元気応援チーム」

「とどける」元気応援サポーター)

木村 圭氏 (釧路市教育委員会事務局 学校教育部 教育支援課 専門員)

長谷川 慶泰氏 (泉大津市教育委員会事務局 教育部 指導課 指導主事)

上田 さとみ氏 (湯浅町教育委員会事務局 スクールソーシャルワーカー 兼

湯浅町家庭教育支援チーム「とらいあんぐる」 リーダー)